

第10回ワールドジムナストラダ（世界体操祭）ベルリン大会視察報告

川端昭夫*

Report of 10th World Gymnaestrada in Berlin

Akio KAWABATA

I. はじめに

1995年7月8日より15日までドイツベルリンにおいて第10回ワールドジムナストラダ（世界体操祭）が開催された。今回の大会は、体操国ドイツでの開催という意味合いと、東西統合後初のベルリンへの興味から出発前から大変楽しみであり、その分、大会期間中は大会の内容からその関連行事などに至るまで十分な成果が得られたのでその事情をありのままに報告したい。

1) ワールドジムナストラダについて

「ジムナエストラダ (Gymnaestrada)」は、語源的には「ジムナスチックス」(体操)と「エストラダ」(道とか舞台)との造語で、「体操への道」、「体操演技台」などを示す言葉であり、4年に一度開催される一般体操の国際的な祭典である。国際体操連盟(FIG)は、国際体操連盟内に一般体操委員会を設け、その普及にあたっており、その最も大きな行事がジムナストラダである。FIGは、ジムナストラダについて、次のような目的をかかげ、一般体操の普及に努めている。

1) 身体を動かす喜びと感動を起こし、自ら

活動する関心と呼び覚ますこと。

2) 表現(心からの動き)の可能性を示し、理念を伝えること。

3) 体操の最新の認識〈理解〉と発展を示すこと。

4) 関心をもつ指導者の再教育に寄与すること。

5) 各国が自国の体操の特徴や体操に対する考え方を披露すること。

6) 民族間の相互理解と友好関係に貢献すること

7) 一般体操の価値と多面性を伝え、世界的な普及を計る。

2) ジムナストラダの歴史

1950年のバーゼル会議の決議で1953年第1回がオランダ(ロッテルダム)で開かれて以来、ほぼ4年に一度開催されており、第2回1957年ユーゴスラビア(ザグレブ)、第3回1961年西ドイツ(シュツットガルト)、第4回1965年オーストリー(ウィーン)、第5回1969年スイス(バーゼル)、第6回1975年西ドイツ(ベルリン)、第7回1982年スイス(チューリッヒ)、第8回1987年デンマーク(ハーニン)、第9回1991年オランダ(アムテルダム)、第10回1995

表1 ジムナストラダ開催地及び参加数

開催年度	開催地	開催国	参加国数	参加者数
1953	ロッテルダム	オランダ	14	5000
1957	ザグレブ	ユーゴスラビア	16	6000
1961	シュツツツガルト	西ドイツ	16	10000
1965	ウィーン	オーストリア	28	15000
1969	バーゼル	スイス	29	9600
1975	ベルリン	西ドイツ	23	10500
1982	チューリッヒ	スイス	23	14200
1987	ハーニン	デンマーク	25	17300
1991	アムステルダム	オランダ	28	19500
1995	ベルリン	ドイツ	35	19194

年ドイツ（ベルリン）の順の開催である。表1は、各開催年度による国名、参加国、参加人数を示している。参加国も人数も、徐々に増え、各国のジムナストラダへの理解の浸透と一般体操の普及が伺える。

II. 第10回ワールドジムナストラダの内容報告

1) 期 日 平成7年（1995年）7月8日より
7月15日

2) 主 催 国際体操連盟（FIG）

3) 参加国、参加推定数

今回の参加国および参加推定数については表2に示されている。多数の参加者を仰ぐ国は、体操国のスイス、フィンランド、ノルウェー、開催国ドイツ、オランダ、デンマーク、スエーデンなどである。新しい国ではバルティッシュ3国や中国などの参加も見られ、一般体操普及の兆しも伺える。

4) 会 場

ベルリン市内の北西部に位置するカイザーダム駅から徒歩10分で体操祭会場のICC-Hall（国際会議場及び見本市会場）である。近代的な建築感のある建物とその周辺にちりばめられた体操祭のフラッグやプレートが極端に仰々しくないドイツ的な素朴さを感じて嬉しい。内部

表2 参加国及び参加推定数

国 名	人数	国 名	人数
オーストリー	268	ナビビア	55
エジプト		オランダ	1494
ベルギー	552	ニュージーランド	51
ブラジル	662	ノルウェー	1353
中国	30	オーストリア	277
ドイツ	1464	ポルトガル	1385
デンマーク	740	ロシア	30
エストニア	50	スエーデン	826
フィンランド	1930	スイス	3295
フランス	116	スロバキア	175
ギリシャ	234	スロベニア	48
イギリス	795	スペイン	112
アイルランド	116	南アフリカ	788
アイスランド	60	チェコ	574
イスラエル	155	アメリカ	308
イタリー	461		
日本	569		
カナダ	413		
ラトビア	51		
リトアニア	64		
ルクセンブルグ	41		
総 計		36カ国	19542

(人)

に入ると多数あるインフォメーション、バンク、ショッピングパートが続きいかにもイベント会場を思わせたが、一般発表や、フォーラムなどの会場は、全ての会場で演技空間と観客席のゆ

とりが清潔感ある環境設定を思わせる。しかも、体操祭のアピールグッズの設定や放送設備や音響の良さも感じられ、会場によっては演出のための照明設備などの用意もみられ、演技発表には十分な会場設定である。

5) イベント, 展示

会場内には、近代ドイツスポーツ史を年代を追って展示をしている会場、ドイツ体操の父ヤーンの活動足跡を追ったドイツ体操の歴史の展示及びドイツ体操発祥の地ハーゼンハイデでのツルネンの実演などいかにも勝ち取ってきたスポーツ文化を大切にするドイツ人らしい貴重な情報である。また、内部のスポーツ関係の用具及びスポーツ手具器具などの展示も多彩で目を楽しませてくれた。

6) プログラム内容

プログラム内容は、7月8日から15日までの1週間の間、開閉会式を含む大会行事、演技の発表及び指導提供を主体とする一般発表（室内）、大型グループの発表（室外）、指導方法の提供・デモンストレーションなどを課題とするフォーラム、大会特別企画の各国の夕べなど発表数も多く行事も立体的に組まれた多彩なプログラムであった（表3参照）。

7) 演技内容

(1) 一般発表 (室内)

一般発表では、リズム体操・手具・器具体操など体操に係わる内容、接点領域としての多様なダンス発表、技能をめざすスポーツ領域の体操、例えば新体操、アクロ体操、体操競技（器

表3 第10回ジムナストラダ大会プログラム

月 日	午 9 : 00- 前	午 13 : 30- 後	夜 18 : 00-
7 / 8	<div style="text-align: right;">開会式</div>		
7 / 9	一般発表リハーサル (一般・大型グループ)		
7 / 10	37カ国255チーム 10カ国13グループ		スカンジナビの夕べ(DH) 日本の夕べ(ICC)
7 / 11	一般発表第 1 回目 (一般・大型)		スイスの夕べ(DH) ポルトガルの夕べ(ICC1)
7 / 12	一般発表第 2 回目 (一般・大型)		ドイツの夕べ(DH) チェコとスロバキアの夕べ(ICC1) ベルリンのイメージ(ICC3) バルティシェの夕べ(ICC1)
7 / 13	一般発表第 1 回目 (一般・大型) <div style="text-align: center;">コンGRES</div>		イギリスの夕べ(DH) イタリアの夕べ(ICC1) ベルリンのイメージ(ICC3) 南アフリカの夕べ(DH) スペインの夕べ(ICC1)
7 / 14	一般発表第 2 回目 (一般・大型) <div style="text-align: center;">コンGRES</div>		FIG-GALA(ICC1)
7 / 15	ドイツ体操連盟コンGRES 「ハッピージムナスティックス」		閉 式

指導者のためのフォーラム

10
カ
国
34
グ
ル
ー
プ

注) DH: ドイツホール, ICC: 国際会議場を示す。

械体操), トランポリン, タンブリングなどに加え, エアロビクスダンスやスポーツエアロビクス(競技としてのエアロビクス)などが加わりより発表領域が広がり, 個々の領域にも多様化が見られる。

(1) 体操関連の発表について

従来では体操領域の中で主に位置づけられるリズム体操が多く見受けられたが, これらの体操内容は, 全体として件数的に減る傾向にある。従来では, 20世紀初頭の体操改革運動以来の全身的動きづくりを目指すこれらの体操は, 体操領域の課題が動きづくり以外にも, リズム指導方法, 音楽と動きとの関係などの多くの課題により展開される意義の大きい領域である。

伝統的なリズム体操として, 基本運動を主とする体操, 手具体操系, 器具を使った系列など多彩であったが, テーマとしても, 課題としても以前よりも発表内容が減る傾向にあった。

ダウシュレーの発表内容は, 基本運動を主体に構成した内容は, 基礎的なながら全身的な動きへの問いかけをさせた。また, 打楽器の演奏に合わせながら運動者自らが拍子木を叩きリズムを形成しながら動く発表も, 音響的補助のあり方, 主体とするリズムからの発展など示唆の多いものであった。メダウでは, リズム体操の他に, 器官体操(Organgymnastik)という身体機能や内臓諸器官を高めるなどの課題の体操も発表され, 医療体操に属する体操として健康づくりとの接点で意義をもつ領域と言えよう。

体操祭では, 多彩な手具をつかった発表も見られる。体操の動きを発展させる手段の一つとしての手具は, 動きを引き出す, リズム形成をする, 体づくりや動きづくりを具体的に楽しさを引き出すなどの意味をもつものである。従来は, 動きづくりのため全身的な動きの習得の手段や女性の動きの美しさを高める手段として



写真1

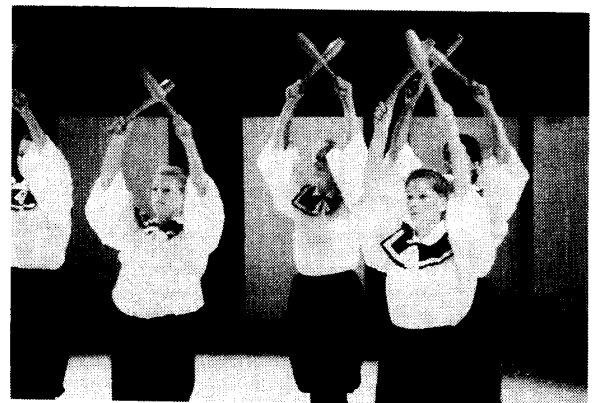


写真2

小数例ではあるがリズム体操の発表としては, スウェーデンのマルメチームの発表で, 少女の基本運動を主体に構成された基本体操, チームの代表的なボール3つを同時に操作しながら動く, 或は, 操作しながらステップを変える演技などの高い技能や, ボール2つを同時にまた交互に連続的につきリズムを形成するなどの演技も素晴らしさを感じる。また布を振る, 回す, 波動などなどで構成した演技も空間での大きさや体の延長としての布の動きが美しい。〈写真1〉

また, ドイツの古くからの体操学校であるメ



写真3

の意味の多かったものが、現行ではより多様化している。

従来からある手具を使った例では、伝統的なものではボール、リボン、縄、棒、棍棒、布、タンバリンなどが様々な課題の中で使われるが、今回の使われていた手具を使った発表では、ボールを使ったスエーデン〈マルメ〉の内容、イギリスの棍棒、スエーデンの少女による、縄跳び運動中に転回系を加える内容や2人組で跳びながらの位置を変える、姿勢を180度変えるなどの跳び方の可能性を示した内容、また通常の棒（スティック）であるが日本〈湯沢きよみチーム〉の棒を連結させて使う演技などまだまだ可能性を感じた。〈写真2, 3〉

この他、体操では、手具以外に大きな器具が使われることがある。とりわけ男子の体操では、男性的な特性に合い、運動者が協力して器具を扱うことで体づくりや動く楽しさ求めることができる。従来からの例では、椅子、長椅子、梯子、器械体操器具などが使われおり可能性は広い。極端に大きな器具・手具を使う発表例は、チュービンゲン大学の梯子やホースを使った発表〈テーマ：fire work〉の動きの可能性を求める方向は、身体運動はあまり伴わない点を除き、多人数で人を飛ばす、数人で梯子を手で支持し、数人が梯子の上で水平にバランスを取る、数人が梯子を水平に支持し、梯子の両端につかまり風車のように回転するなど、大型手具としての可能性が示され楽しい。また、スイス80〈Assoc. Vaudoise de gymnastique feminine〉の少年の利用した四角いボックスは、持ちづらさはあるが、持つ、回す、乗るなどができ、しかも立体的な組立でも考えられるので興味を引き出される器具として興味深いものであった。

(2) 新しい手具の試みや手具を使った特性のある内容としては次の発表が見られた。

- ① フィンランド〈regin 3〉の女性の日常労働の場面をイメージしたすきを使った内容とパラソルを使った内容は、動きのイメージを引き出す使い方として面白いと思われた。
- ② スイス〈Oberwalliser Gymnastrada Gruppe 他(41-45)〉の婦人の窓枠、タンバリ

ン、棒とビニールを使った内容では、窓枠は空間の限定や自分の空間の位置づけや装飾の意味合で面白く、棒とビニールは、棒で地面を突きながら音を出し、その音に呼応してビニールを手で擦り合わせて音を出す中での音のコミュニケーションに興味を引かれた。

- ③ ドイツ〈ミュンヘン工科大学〉の蛍光性のあるライティングボール、ライティングリボンなどは、暗幕状態で目を引かれた。手具の指導上での興味づけや動き方の評価、ダンスなどの表現法や演出のためなど利用の可能性を考えれば面白いであろう。
- ④ 日本〈HGG&TsumuraGC〉の利用した偏平な円盤を使った内容は、円盤を持って使う、立てて転がす、置いて円盤に乗り回転運動をするなど、運動も多様に引き出され面白い手具である。

(3) ダンス領域の発表について

世界体操祭においてダンス領域は、表現性の強い発表、現代的な感覚のダンス、エアロビクスダンスなど発表中でも多数の発表内容をもつものであり発表としての広がりも大きい。ダンス関係の発表の目だった点は次の通りである。

- ① 表現性の強いもの〈オーストリーのダンスチーム〉は鳥の羽をつけた発表には衣装と動きと照明の一体感に興味を引かれた。スエーデンの自国の特性バイキングを表現したものも多人数でダイナミックな演技展開であった。
- ② ジャズダンスは、第7回、8回では発表が目立ち、ジャズダンサーやジャズ体操家による演技や優れた発表が見られたが、今回では件数的にも少なく目だった発表は見られなかった。
- ③ 以前流行したブレイクダンス的な内容〈オーストリー〉も現代的な感覚の動きを伝えてくれる。
- ④ エアロビクスダンスとスポーツエアロビクスについては、フィットネスからの流れのエアロビクスダンスは、中高年などは体力づくりの一貫として、また若い世代は従来より豊富で個性的な運動内容で展開され、しかも集

団による隊形変化などまで表現豊かな発表が見みられた。また、この関連では、1人、2人、3人で競技としてエアロビクスダンス（スポーツエアロビクス、日本ではエアロビクススポーツと名称）の発表もみられ領域の広がりが見られる。

- ⑤ ミュージカル的発表としては、スウェーデンマルメの人をピアノの鍵盤にたとえ、指揮者がピアノ演奏指揮することをイメージした内容は、チュリッヒ時の笛吹き演奏をイメージした内容に準じ興味を引かれた。あるもののイメージをふくらませて動きを引き出す一つ方向性であろうと思われる。
- ⑥ 今回も各国の特性のあるフォークダンスが見られた。フィンランド〈Region 2〉、スウェーデン〈マルメ〉、ドイツなど衣装、音楽と共に場をなごませる。回を重ねるごとに感ずるが各国の多数あるフォークダンスの下地のある中で育った人々の動きの数は、ステップやターンの多様さ、対人と関連した動きなどの点でも全く変わるであろうと思われた。



写真4

(3) 対象別発表について

演技者の対象は、演技発表の可能な児童から上は青年、中高年まで幅広い。〈写真4〉ただし、国により演技者の層が異なることは変わらない。技能重視及びショー的な内容重視の傾向から全体的に中高年グループの一般発表が減り、残念な気がしている。ただし、スイスチームについては、組織的にチーム編成を考えているためか、多年齢層の出場があり、しかも男女片寄

る傾向のあるなかで男子の層が青年層から中高年まで見られる国で層の厚さが感じられる。

男子の体操については、演技者の中で、件数的には少なかったが、スウェーデンリトムグッパナのショー体操、デンマークの青年層の集団徒手体操は心強く思われた。リトムグッパナは平均年齢が65歳の中高年のチームで、以前からストーリー性のある自由な動きで魅せる体操（自称ショー体操）でいつも会場のわれんばかりの拍手を誘う演技である。また、デンマークのオレロップ体操学校やスベンボー、リングストなどの男子は、徒手的体操と跳ぶ、移動などの全身運動や転回を組み合わせたダイナミックなものであり、音楽に合わせた一人と二人での同調性のある連続的なタンブリング、ミニトランポリンを使った集団での連続宙返りの演技など多彩である。また、スイスのツオリコーフェンの中高年体操は、スイング系の動きなど簡素な動きであるが無理なく動けるように工夫されており好感がもてた。この他スイスのチームは、中高年でも体操器械をつかって簡単な技能の運動を音楽に合わせておこなうなども特徴的であった。

特殊な対象の発表例では、イギリスのダウン症や知的障害の中学・高校生が音楽に合わせて器械体操（マット運動など）を連続して行う発表やドイツ〈ミュンヘン工科大学〉の車椅子の障害者の発表など、前回のアムステルダムの時と同様に多く人の関心事である。7月16日朝刊ベルリナーモルゲンのギムナストラダ関連記事「サマランチ会長組織を考える」の中で「競技スポーツと同様に、大衆スポーツや障害者スポーツも大きな関心事である」として障害者スポーツを位置づけており今後の新しい方向性も伺える。

(4) 大型グループの発表（室外）

一般発表とは異なる多人数のグループ発表は、モッセンスタジオンで行なわれ、多人数の集団体操的な内容の発表から多人数による多彩な展開を考慮されたマスゲームまで行われた。前回のオランダ時よりもマスゲームとしての特性である規模、統制力、秩序性、演出に欠ける

が、集団体操としての良さや、大きな空間での体操の展開に感心した。マスゲームは、基本的な運動による全体としてのリズム形成や、集団リズムの形成など興味深い内容である。今回の発表についての印象を次に述べることにする。

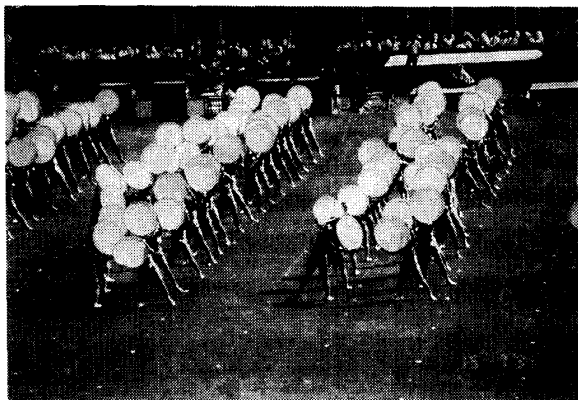


写真5

- ① 今回8カ国13チームの発表の内大規模な3カ国のみ発表を視察した。ポルトガル、スイス、ノルウェーである。内容的には、ポルトガルは、パラソル、組体操、ミニトラ、ボンボンなどを使った解放的な演技発表である。スイスは、複合グループで斬新的な手具（円盤、輪のプレート、四角プレートなど）、手具の特性のある運動動き、調和のとれた衣装、隊形姿勢変化などレベルの高さを感じた。ノルウェーは、中高年の女性を中心とした上下の長い紺と青のウェアによるスローの動きを主体とする隊形変化が印象的であった。
- ② 前回のアムステルダム大会では、チェコの男女（中高年と少女）の男性のスピーディーな移動と集団での転回、少女の優雅な動き、迅速な隊形の変化などを主体にする素晴らしいマスゲームなど発表数も多く、レベルの高さが感じられた。今回の発表は、マスゲームとしての特性である規則性、秩序性、総合性にややかけ、マスゲームというよりも、解放的な集団体操の感が強いものが多い。内容の点では、スイスチームの発表内容と展開に感心した。
- ③ マスゲームで使用されていた手具は、表現性の強さ（アピール性）の有効性や簡易性、

使いやすさなどの点でも体操への示唆が大きい。今回の発表では従来より新しい内容が加わり発展をみせる。とりわけ、スイスチームの発表内で使用されている手具が目をつけた。〈写真5〉

- 円 盤……輪に布製か、ビニール性の生地をかぶせてプレートにする。捉える空間が大きく、全体が黄色に輝く。軽量のため有効ある。色が特徴的で、空間を大きく捉えられるのがよい。
- 多重輪……輪にきれをかぶせ多重輪にする。色が特徴的。中空の空間が印象的である。
- 国 旗……大きさ、色合い、風でなびく様が印象的である。

(5) 開会式マスゲーム

開閉開式のマスゲームは、1936年ベルリン五輪の開会式の間であるオリピックスタディオンで行われた。開設当時と変わらないスリバチ状のスタンドの崇高さと入場口にあるカールディーム博士を代表する設立者のレリーフなどが歴史を思わせる。

開会式のマスゲームは、子供も対象の遊戯的な内容のものから、フォークダンス、ダンス、近代芸術的な内容、婦人の集団体操、マット・ラート・布などを使った内容など多彩であり、マスゲームの新しい方向性も痛感した。とりわけ、黒白の布・銀金の布、黒白の衣装などを使い、身体運動が主体となるのではなくそれらを使った形状の変化や全体の展開などに主眼をおかれた演技は、抽象的な音楽と合まって、抽象的で、身体表現とははずれるがまさに近代的なマスゲームの一方向性を表すものであろう。

また、手具の利用が目立つ中で、マットをタングリングだけでなく、壁のような使い方、面の様な使い方、ドミノ倒しのような使い方など、マットの色彩や形状の特性から奇抜さを感じた。

(6) 閉会式マスゲーム

閉会式の中では、ドイツチームのマット、スポンジ（三角、四角）を使った演技が目をつい

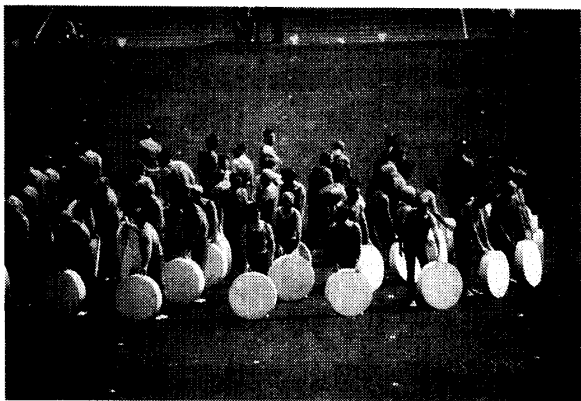


写真6



写真7

た。全体的な演技のまとまりまはなかったが充分斬新的なアイデアが感じられた。また、前述した、スイスチームの演技も優れており輪が映えた。オランダのミニトラとパラソルの演技もパラソルの色彩と回転運動が目に見鮮やかであった。〈写真6, 7〉

(7) 各国の夕べ, FIG-GALA

大会の特別企画として、参加各国が自国の体操を主に発表する各国の夕べがある。これは各国が自国の体操を主に、登録グループが単独、合併形式で発表する演出も含めた内容となる。各国の夕べは、ドイチェランドハルで行われた。前回アムステルダム大会の一般体操委員会の方針により観客動員を考慮して高い技能の方向やショー的な方向が求められるようになったためか、各国とも演出も多く、体操演技を主体として展開する傾向が少なく残念な気がした。

しかし、そういう中であっても、スカンジナビアの夕べは、スウェーデンの楽しい体操、デン

マークの男女の技能の高い体操、フィンランドの女性の優雅な体操などが主体の素晴らしい演技であり、ドイツの夕べは幕間が多かったが展開の旨さを見せた。前回優れていたスイスは、今回も体操の多年令にわたって出場しているが、体操的な内容よりは、体操器械を使ったショー（平行棒を数名で使い振動系や支持系運動などを楽しく演出するなど）や集団での器械体操（体操競技）〈ゼクチオンツルネン(Sekktionsturnen)〉をいかした内容が多くみられた。日本の夕べは、参加14チームの合同発表であったが、日本の伝統文化である能・歌舞伎の幕間出場も工夫され、極端な演出の少ない好感の持てる展開であった。第6回のベルリン大会から出場した日本の体操発表も、回を重ねる毎に、技能も高く、演技にも工夫がなされ好感がもてた。が、発表のテーマやイメージとして村祭りのような感じや、伝統芸能的なお面や農村の網笠などを使った内容で出されており、日本的なイメージを出そうとするあまり極端に手段の利用やイメージを強調する服飾を使う感があり、「今の日本の体操のイメージ」、「日本的なものとは」を深く考えさせられた。

FIG-GALAは、各国の選出するグループ及びFIGの推薦するチームが、演技を披露する場である。今回の2時間の間、代表グループの技能の高い演技を連続して見る事ができた。

4) フォーラム

今回初めて、指導法、指導内容を提示するフォーラムを聴講したが、体操やダンスの指導内容が実際に発表形態の中で提示される場であることが羨ましい感じがする。聴講した発表は、3件のみであったが、とりわけダンスの指導法で3グループを内容をカノン形式（時間差）で発展させながらの指導展開には興味をひかれた。

III. 今後の展望——スウェーデンイエテボリに期待する——

今回で体操祭の視察は3度目になる。その都

度「体操」の魅力に引かれ良いものに接することへの期待をもち、それを充分叶えてくれた。今回もトータルとしてその要求はかなえられたと言えるが、体操やリズム体操に属する内容が以前より多く目につかず残念であり、またそれに説得性を持てるグループ発表も減ってきている。開催側がジムナストラダを「大衆スポーツの重要な祭典として位置づけ」、また、発表領域の多様化と技能化の方向を目指しているなかで、体操領域がスポーツの多様化、高度化に見合うように、伝統的な「体操」の領域の位置づけがなされてゆくであろうか。

今回の世界体操祭は、スウェーデンのイエテボリで開催される。体操王国スカンジナビアの中でも一般体操の層が厚く、伝統的なマルメのリズム体操、リトムグッパナの解放的な楽しいショー体操、オレブロの見るだけでほえましいハッピージムナティックスなどいままでも多くの感激を与えてくれたスウェーデンの体操だけに多くの期待を寄せたい。

付 記

スウェーデンは、大会の開催以前にも体操の主要国として知られて、その体操の実情も興味あるところである。まとめの一貫として多少スウェーデンにおける体操の実情を付け加えたい。

1) スウェーデン体操の現状について

スウェーデンは、18世紀リングによる解剖学生理学に基づき考案された姿勢づくり、体づくりの体操（形式体操〈日本では徒手体操の原型〉）が紹介普及され以来、体操的な基盤の強い国であり、現在でも体操主要国の一つとして知られている。

〈スウェーデンの体操協会とリーダー組織〉

スウェーデンでは35万の体操人口、2000の体操クラブを有する世界有数の体操国であり、その大部分を統括する組織がスウェーデン体操協会である。これは各地域での体操協会を形成し、更に全国24の協会がまとまりスウェーデン体操協会を形成している。1992年時で体操クラブ数

1746、協会メンバー数309,168名、リーダー数18000人〈含むアシスタントリーダー〉である。組織による主な活動として、成人の体操、子供と青少年の体操、競技体操、健康・保健業務、出版物、研究機関、教育機関などの広範な活動をおこなっている。

2) スウェーデンの体操の内容

スウェーデン体操協会は、国内の体操を次の6部門に分け、それぞれの委員会が部門を担当している。内容は、1)子供の体操(3-10歳対象)、2)青少年の体操(10歳-16歳)、3)体操競技、4)新体操競技、5)成人の体操である。この中で成人の体操として、最近「GIMMIX(ギムミックス)」の名称を掲げている。内容は、軽い強度の体操、中強度の体操、強い強度の体操、jazzgymnastik, Workout, Low and high impact gymnastik, 水中体操、時流の体操、体力テスト、健康セミナー、その他などをあげ幅広い普及に努めている。

先の組織体制、リーダー養成及び活動の内容などの点でも現行の日本の実情からすると羨ましい限りであり、日本の一般体操の普及の点でも是非参考にしたいシステムである。スウェーデンでの世界体操祭の内容と併せて、その実情視察が楽しみである。

参考資料、参考文献

- 1) 今村嘉雄他編,「新修体育大辞典」(世界体操祭の項),不昧堂,1976年
- 2) 「ベルリナーモルゲン」(7月16日版),1995年
- 3) ギムナストラダ組織委員会,「Gymnastrada Guide-HANDBUCH DER 10. WELT-GYMNAESTRADA」,1995年
- 4) 春山国広,「第10回ワールドジムナストラダベルリン大会報告」,1995年
- 5) 平坂直美,「ワールドギムナストラダ」,学校体育 pp. 64-65,1995年
- 6) 滝沢かほる,「ギムナストラダ感想文集」,1995年

7) 松本迪子, 池田明子, 「SWEDEN の地域体操リーダー——その養成と MOTION リーダーの実態——」, 帝塚山学院短大研究年報, vol. 31, pp. 13-29, 1983 年

8) 松本迪子, 飯田貴子, 道園百合子, 池田明子, 「スウェーデンの地域体操リーダー(第

2 報) ——その養成と GYMMIX 実態——」, 帝塚山学院短大研究年報, vol. 41, pp. 113-134, 1993 年

9) 湯沢きよみ音楽体操グループ編, 「第10回ワールドジumnastラーダ報告集」, 1995 年